

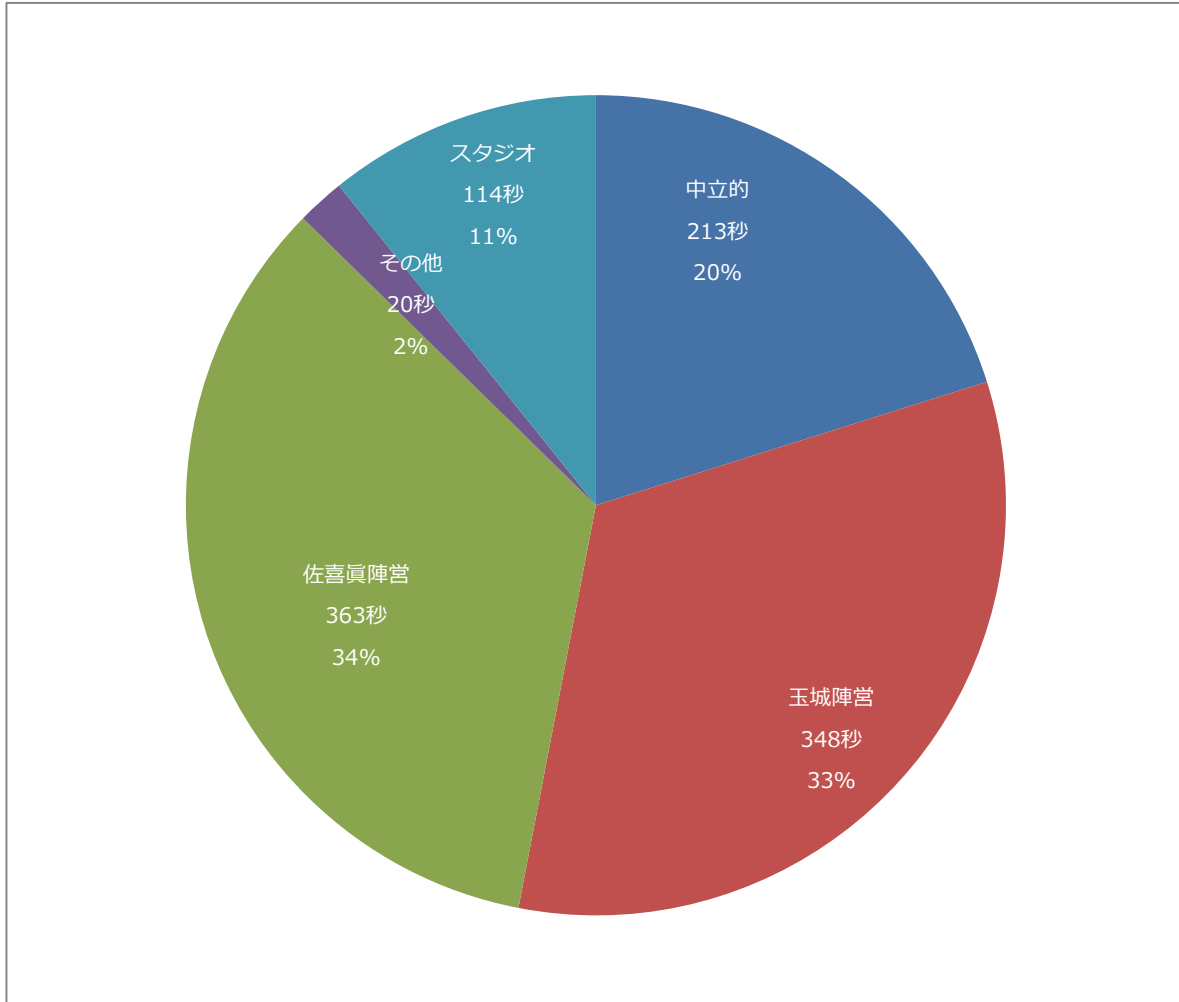
# TV 報道検証【報道特集】 報告書

テレビ局： TBS	番組名：報道特集	放送日： 2018 年 9 月 29 日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子		
検証テーマ： オープニング、イギリスの EU 離脱問題、両陛下と国民体育大会 【特集】 沖縄県知事選挙、【特集】 ダッカ事件から 41 年		
報道トピック一覧 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 沖縄を襲う台風 24 号、明日には西日本に上陸                          関西空港があす午前 11 時から滑走路雨閉鎖                          JR 西日本は京阪神エリアで朝 8 時頃から順次運転を取りやめ正午までにはすべての運転を取りやめ</li> <li>・ インドネシアで M7.5 地震</li> <li>・ イギリスの EU 離脱問題</li> <li>・ Facebook で 5000 万人の個人情報流出したおそれあり</li> <li>・ 千葉県大網白里市の河口で人間の胴体のものが水面から発見される</li> <li>・ 両陛下と国民体育大会</li> <li>・ 吉澤被告の車を使い追加の実況見分が行われる</li> <li>・ 【特集】 沖縄県知事選挙</li> <li>・ 【特集】 ダッカ事件から 41 年</li> </ul>		
放送法第 4 条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ オープニング：結論→特に問題なし                          番組のオープニングで金平キャスターが「ええ、台風 24 号が今現在、沖縄を襲っています。その沖縄では明日県知事選挙が投開票日を迎え、新しい県知事が選ばれます、台風の嵐の中で嵐のような選挙戦が展開されています、今日の特集でお伝えします。」と発言していた。この発言の時間は 18 秒で、放送法上の問題は見られなかった。</li> <li>・ イギリスの EU 離脱問題：結論→特に問題なし                          英国の EU 離脱まで今日で半年となり、イギリスと EU の離脱交渉が決裂し経済が混乱する事態が現実になっていること、特に食品業界が揺れておりチーズ輸入業者の「トラックが国境で動けなくなることが心配です。週一回新鮮なチーズを冷蔵トラックで運んでいるので。」や、ラム肉となる羊を飼育するウェールズの牧場主の「輸出する際に関税がかかる可能性があります。アムステルダムへの輸出を増やしていますが、直ちに輸出を辞める必要が出てくるかもしれません。」や「EU 離脱の先行きが見えなので鹿の肉を生産すると決めました。EU 離脱後ラムの輸出がどうなってしまうか心配です。」という不安を顕にしたコメントが取り上げられていた。このトピックについて当てられた時間は 172 秒で、放送法上の問題は見られなかった。</li> <li>・ 両陛下と国民体育大会：結論→特に問題なし                          天皇皇后両陛下が福井県で開催した国民体育大会の開会式に出席されたこと、台風の影響で両陛下は予定を一日早め今夜帰京されるとのことが報じられた。このトピックについて当てられた時間は 66 秒で放送法上は特に問題は見られなかった。</li> </ul>		

・【特集】 沖縄県知事選挙：結論→問題あり

日曜日の投開票日が迫った沖縄県知事選挙についての特集だった。

この特集では中立的な場面、玉城デニー候補の陣営に焦点を当てた場面、佐喜真淳候補の陣営に焦点を当てた場面、その他の候補に焦点を当てた場面、スタジオでの議論が繰り広げられた場面の大きく5つの場面があった。この特集に当てられた時間は1058秒で、それぞれの場面への時間配分及び比率は以下の通りであった。



中立的な場面では沖縄県知事選挙が行われていること、は自民・公明・維新などが推薦する佐喜真淳氏と、翁長県政を支えたオール沖縄勢力が支援する玉城デニー氏との事実上の一騎打ちとなっていることが伝えられた。

玉城陣営については取り上げられたシーンは以下に朱記した通りである

ナレ「前、衆議院議員の玉城デニー氏。先月死去した翁長丈志知事の後継として辺野古新基地の建設反対を掲げる。」

玉城氏「もう二度とヤマト政府の言いなりにはならない。アメリカの言いなりにもならない。私は翁長雄志知事のその遺志をしっかりと引き継いだということをけっしんしている候補者だからです。」

ナレ「街頭では選挙カーや高い第二は登らず、市民と同じ目線で訴える。」

玉城氏「平和だからこそ経済、経済の循環があるからこそ、暮らしが安定する。だからこそ私たちは今一度確認するんです。沖縄にこれ以上新たな米軍基地は必要ないと。辺野古新基地建設は体を張ってでも止めるのだということを。2012年アメリカはもう辺野古に基地を造らなくても、海兵隊を分離して転換させるということを発表いたしました。アメリカの計画にのっとって海兵隊のハワイ、グアム、オーストラリアへの移転を積極的に進め

れば、普天間は閉鎖返還できるということを私は訴えて参ります。」

ナレ「地元ラジオ局の DJ として活躍した経験を活かし、ライブイベントで歌を披露するなどして浸透を図る。支援するのは、保守、革新の枠を超えて翁長県政を支えてきたオール沖縄勢力だ。ポスターには翁長知事の写真を入れて、後継候補であることを強調する。先週、那覇市で開かれた集会には、翁長氏の妻、樹子さんが駆け付け、壇上に立った。」

翁長氏の妻、樹子さん「この沖縄は翁長が心の底から愛して、140万県民を命がけで、守ろうとした沖縄です。出てくるというのは正直、とても躊躇がありました。でも、もうなんだか翁長がしょうがないな。もうみんなで頑張らないといけないから、君も一緒になって頑張っておいでといってくれたような気がして、今日はこの場に立っております。」

ナレ「集会には、次男翁長雄治那覇市議の姿も。」

掛け声「がんばろー。ありがとうございます。頑張りましょう」

ナレ「おととい、翁長樹子さんに自宅で話を聞いた。」

金平「新都心の（集会に）出られたでしょ」

樹子さん「こないだの 22 日。初めて 1 回きりよ」

金平「あれはどういう決断で」

樹子さん「ほとんど国家の暴力といたくなるぐらい、すさまじい勢いでやらせるわけですよね、中央政府の方たちが。それぞれのグループをぎゅうぎゅうに締め付けて、もう逃げたやつは許さないみたいな勢いでやってらっしゃると、たくさん聞こえてきたもんだから、ちょっと違うでしょうって。ひとりひとり沖縄県民に考えさせるそういうあれは無いんですか？って勇気はないの？って言いたいわけ。それでしばらくじっと我慢に我慢していたが、あーもう無理と思って」

ナレ「玉城陣営は選挙戦で政党色を前面に出さない戦術を取っている。支援する立憲民主党など、国政野党の幹部が続々と沖縄に入ったが、玉城氏と並ぶことはなかった。」

ナレ「オール沖縄の中心的存在、沖縄経済界の重鎮、金秀グループの呉屋守将会長はその狙いをこう話す。」

金秀グループ呉屋守将会長「イデオロギーよりアイデンティティーといった亡き翁長知事の考えに沿うならば、政党色よりもその前のウチナンチュの尊厳、それをを取り戻すのが先でしょと。総決起大会でも政治家の先生方、国会議員の先生方は名前だけ紹介しましたがけれども、スピーチはご辛抱いただいたというところで政党色はあまり出ずに、ウイングの広いオール沖縄という風に言えたと思います。」

ナレ「選挙戦、最終盤、玉城氏はこう訴えた」

玉城氏「物量から言うと、ゾウとアリくらいの違いがあります。ゾウの圧力に対して、アリの力で立ち向かうことができるかどうかということがかかっているといっても過言ではありません。」

金平「選挙戦戦われて来てですね、今実感していることですね、どうですか？」

玉城氏「私は非常にその選挙期間、いろんな皆さんがやはり、その翁長知事が頑張ってきたことをその萎えさせたくはない。」

佐喜眞陣営について取り上げられたシーンは以下に朱記した通りである

佐喜眞氏「今回の選挙で一番重要なのは、県民の暮らしを最優先する。この県民所得も本土並みに 300 万。その 300 万をまず目標にもって、県民所得を上げていくその努力を私は行っていきたいと思います。」

ナレ「選挙戦へは自民党の小泉新次郎筆頭副幹事長や菅官房長官らが何度も応援に駆け付けた。」

菅義偉官房長官「東京ドーム 220 個分の米軍基地が返ってくることになってるんです。ぜひ佐喜眞知事と一緒に新しい沖縄の街づくり、実行に移していきたいと思います。」

自民党小泉進次郎筆頭副幹事長「残り 1 週間、相手も本気です。こちらもさらに一段ギアを挙げて佐喜眞淳さんをみなさん一緒に知事にしようじゃないですか。」

ナレ「おととい、佐喜眞氏は那覇市で演説を行った。」

佐喜眞氏「住んで良かったと思えるような沖縄を造るためには、対立や分断や争いではなくて、対話が必要なんです。」

金平「佐喜眞候補の演説中ですね、小泉進次郎議員が登場したところですか。えー」

ナレ「今回の選挙戦で小泉議員が沖縄入りするのは 3 度目だ。」

小泉議員「この戦いは佐喜眞さんの応援の輪が広がってきていると感じています。さっきまで私驚きました。こちら左側みたら相手候補の幟まで持ってきている方いますが、とうとう相手候補の方まで佐喜眞さんの応援に来てくれた。」

佐喜眞氏「わたくし一人の力ではまだまだ力不足かもしれませんが、県民の総意とそして自民党、公明党、日本維新の会、希望の党の政党の力も借りながら、わたくしは米軍基地の過重な負担の軽減、基地の整理縮小、そして日米地位協定を改定に向けて、前に進めてまいります。」

ナレ「演説が終わった後、小泉議員のもとにはサインや、握手を求める人が押し寄せた。」

金秀「小泉さん応援の手ごたえはどうでしたか？」

小泉議員「最後まで全力でやるだけです」

ナレ「佐喜眞氏本人にも質問をぶつけた。」

金平「佐喜眞さん最終盤、手ごたえはどうでしたか？」

佐喜眞氏「日増しに増えている、日増しにいいと思います。」

ガイド音声「佐喜眞淳氏の入場です。」

ナレ「支援者が今回の選挙のためにつくったという応援歌を流しながら、選挙戦を続けている。4 年前の県知事選で自主投票だった公明党は、今回、佐喜眞氏を推薦している。」

ナレ「公明党沖縄県連の金城勉代表はこう話す。」

公明党沖縄県本部 代表金城 勉県議「基地もちろん重要。同時にその他のねそういう医療・福祉・教育・子育て、あるいはまた観光振興、経済振興、離島振興、その県政万般にわたるテーマがありますからね、力ある人物は誰かと見比べたときにはこれはもう明らかにわたくしは佐喜眞淳氏。首長を経験して、実際に市政運営をして結果を出してきた。」

ナレ「自民党沖縄県連会長の国場幸之助衆議院議員は」

国場衆議院議員「あと一步のところまで来たと確信しております。宜野湾の市議、県議、または市長として、長らく、この普天間問題に直面してきたのは、佐喜眞候補ですから、やはり彼の一日でも早い、普天間の閉鎖、移設というものはあのここにこそ問題の本質があるんだってことをですね、我々はしっかりと理解して、応援していきたいと思っております。」

金平「辺野古については言及しないっていうのは、戦術としては誤っていなかったと？」

国場衆議院議員「戦術ではなくて、それは問題の本質がどこにあるのかっていうことをしっかりと県民に理解していただくと、そこに尽きると思います。」

その他の候補については「沖縄県知事選には、琉球料理研究家の渡口初美氏と元社員の兼島俊氏も立候補している。」と取り上げられたのみだった。

スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り返された。

膳場「あの長一い行列ができていましたけれども、今回は期日前投票がとても多いんですね」

金平「そうですね。あのきのうまでに期日前投票済ませた人の数が 40 万 5862 人、なんと全有権者数の 35% に上っているってことで、4 年前の知事選の時の 2.6 倍ってこと、こんなに全国で知事選、こんなに見たことないですね。あの取材していうとね、選挙戦の前半ではその組織とか団体による強烈な行きましようっていう呼びかけが目立っていたんですけど、後半は台風の影響で、今回はちゃんと自分で投票したいんだっていう人がまあどんどん駆け付けてきていてですね、毎日が投票日というような状況が生まれてましたね。まあ明日は沖縄も天気が回復するようなので、投票率が上がって浮動票が増えると、選挙結果にも大きな影響が出てくると思いますね。」

日下部「それにしても玉城、佐喜眞両陣営の選挙戦視てますと大変対照的というか、まったく違いますね。」

金平「そうですね、先ほど、佐喜眞陣営というのはご覧のようにこう組織力、宣伝力、物量で玉城陣営を圧倒していたというのが正直なところですね、それに加えて小泉進次郎議員のような、まあ彼は 3 度応援に入ってますね、その人気を最大限に活用するみたいなね、そういう意味ではこうプロの選挙戦を見せつけられたというような気がしますけども、一方の玉城陣営はあくまでも、草の根の力に頼るといえるか、まあゾウとアリというような言い方もしてましたけども、その両陣営の戦い方の違いを見てみると、まるで、本土政府と沖縄県の現在の関係の相似形というか、似姿っていうのかな、取材を通じての率直な印象なんですが、沖縄県の有権者の皆さんには明日ぜひとも、投票所に足を運んでご自分の判断で、一票を投じていただきたいと思います。」

今回の特集では玉城陣営で金秀グループの呉屋守将会長は「総決起大会でも政治家の先生方、国会議員の先生方は名前だけ紹介しましたがけれども、スピーチはご辛抱いただいたというところで政党色はあまり出ずに、ウイングの広いオール沖縄という風に言えたと思います。」とウイングの広さに自信を示す一方で、玉城候補本人は「物量から言うと、ゾウとアリくらいの違いがあります。ゾウの圧力に対して、アリの力で立ち向かうことができるかどうかということがかかっているといっても過言ではありません。」と物量では不利だという認識を示していた。他方で、佐喜眞候補は「日増しに増えている、日増しにいいと思います。」、国場幸之助衆院議員は「あと一歩のところまで来たと確信しております。」と厳しい戦いの中で戦況が良くなっているという認識を示している。勿論これらは当事者の弁であり、当事者としての認識を語ったものであるから、認識が異なるという点については不思議ではない。

しかし、スタジオでの金平キャスターは「先ほど、佐喜眞陣営というのはご覧のようにこう組織力、宣伝力、物量で玉城陣営を圧倒していたというのが正直なところですね、それに加えて小泉進次郎議員のような、まあ彼は 3 度応援に入ってますね、その人気を最大限に活用するみたいなね、そういう意味ではこうプロの選挙戦を見せつけられたというような気がしますけども、一方の玉城陣営はあくまでも、草の根の力に頼るといえるか、まあゾウとアリというような言い方もしてましたけども、その両陣営の戦い方の違いを見てみると、まるで、本土政府と沖縄県の現在の関係の相似形というか、似姿っていうのかな、取材を通じての率直な印象なんですが、沖縄県の有権者の皆さんには明日ぜひとも、投票所に足を運んでご自分の判断で、一票を投じていただきたいと思います。」などと、玉城候補の認識のみを無批判に垂れ流していた。

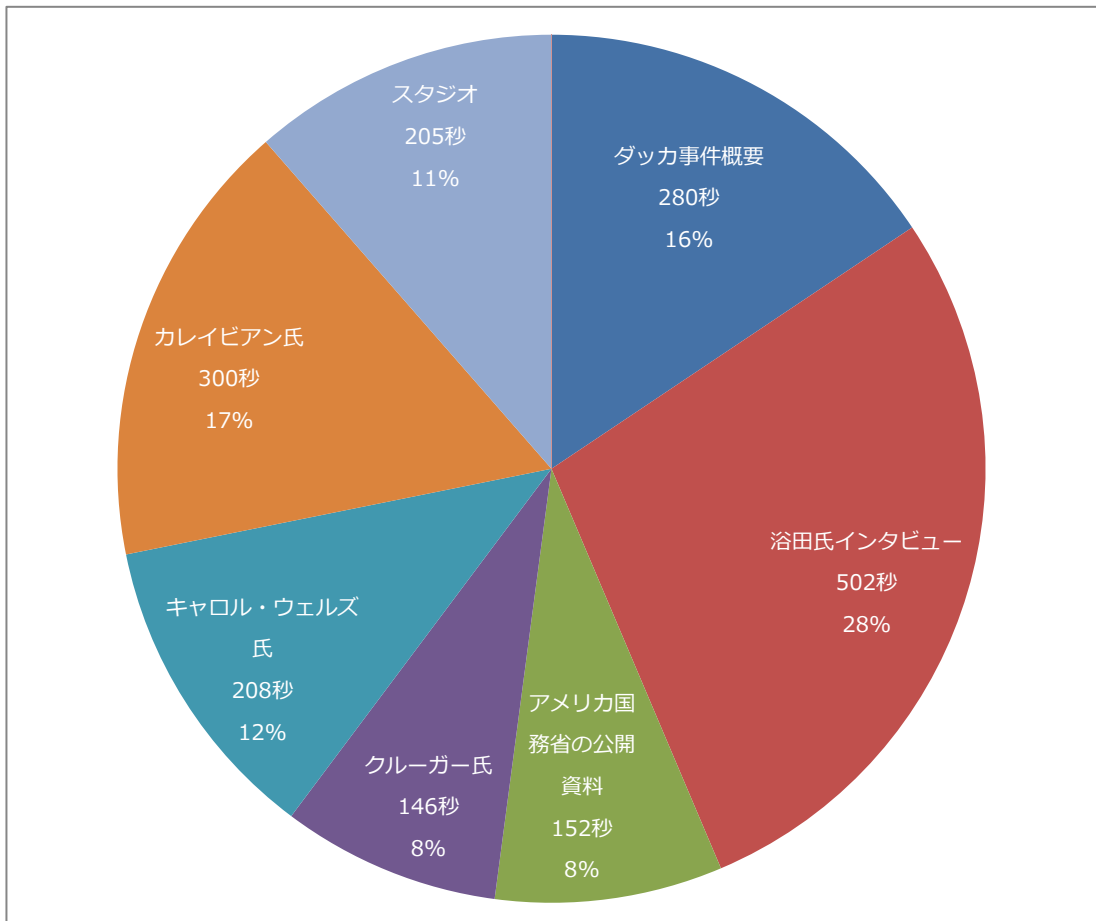
しかし、呉屋守氏が「総決起大会でも政治家の先生方、国会議員の先生方は名前だけ紹介しましたがけれども、スピーチはご辛抱いただいたというところで政党色はあまり出ずに、ウイングの広いオール沖縄という風に言えたと思います。」と語っていたように、玉城候補の選挙戦が草の根的なのはあくまでも陣営の意図的な演出であり、「総決起大会でも政治家の先生方、国会議員の先生方は名前だけ紹介しましたがけれども、スピーチはご辛抱いただいた」ということが可能であったことから、相当なレベルでの組織的な戦いができており、その上であえて政党色を薄めるという戦術を取っていると言える。組織に裏付けられながらも組織色を薄める選挙戦ということでは最近では新潟県知事選挙が挙げられるが、この時は報道特集では自民党系の候補の選挙戦に対して「ステルス

戦略」と評していたことと比べると今回の報じ方はずいぶんと玉城デニー候補の認識に寄り添った報じ方であった。前回の新潟県知事選挙での報道姿勢と比較して考えると、今回のこのような報道姿勢は放送法第四条一向に合の「政治的に公平であること」という点や同項三号の「報道は事実を曲まげないですること」という点で非常に問題があるといえるだろう。

また、一騎打ちの構図の中に収まらない候補を「琉球料理研究家の渡口初美氏と元社員の兼島俊氏も立候補している」の一言で片付ける扱い方も、今回の特集で 1058 秒の枠をとっていることを踏まえると、不当に軽い扱いであると言え、放送法第四条一項二号の「政治的に公平であること」に照らして問題であると言える。

・【特集】ダッカ事件から 41 年

この特集ではダッカ事件の概要について説明された場面、ダッカ事件で釈放された浴田由紀子氏へのインタビュー、アメリカ国務省の公開資料について、ダッカ事件で人質となったアメリカ人のクルーガー氏、キャロル・ウェルズ氏、カレイビアン氏へのインタビューのシーン、VTR を承けてのスタジオでのやり取りという 7 つの場面に大別された。この特集に当てられた時間は秒で、それぞれの場面への時間配分及び比率は以下の通りであった。



浴田氏へのインタビューは以下に朱記した3つのシーンが取り上げられていた。

【シーン1】

金平「浴田由紀子さん。私としては今日インタビューに応じていただいて本当にありがとうございます。」  
 浴田氏「刑務所から出てきて、いま自分の生活を作るのに精一杯なので、あのーテレビなどとかでね、周りの人に自分のことをあまり知られるのはどうなのかなというのがあるって迷いました。」  
 ナレ「浴田由紀子氏。67歳。新左翼グループ東アジア反日武装戦線のメンバーだった人物だ。三井物産など、連続企業爆破事件で殺人未遂などの罪に問われ、起訴、拘留されていたが、1977年のダッカ事件で超法規的措置により釈放された。テレビの取材に応じるのは、これが初めてだ。41年前、東京拘置所から釈放される際、検事からこう告げられたという。」  
 浴田氏「あの、こういう書面を持って、その書面を読み上げる形で、閣議決定に基づき、法務大臣の命令であなたを釈放します。何月何日何時何分みたいなことを言って、」  
 ナレ「釈放された浴田氏は羽田空港からバンガラデシュのダッカ空港に向かった。そこには日本赤軍によってハイジャックされた日航機が強行着陸し、駐機していた。」  
 浴田氏「ついてから非常に長い時間待たされて、おそらく夜中過ぎぐらいまで待たされたんじゃないかなと思います。これから順次釈放、あなた方を人質の人と交換するために釈放しますので、名前を呼ぶので従ってくださいというような説明が全体に対し、ありまして、それでそれからまたしばらくして最初に大道寺あや子さんが連れていかれました。」  
 ナレ「2番目に呼ばれたのが、浴田氏だった。機内に入ると、」  
 浴田氏「こういう感じに座らせられましたね。」



金平「あっこういう感じで」

浴田氏「横にいるんじゃなくて斜めに」

金平「1、2、3、4、5、6だ。」

浴田氏「機内に入ったら、拍手が起こったというのが記憶にあります。」

金平「ってことはつまり、これでもしかしたら、自分たちが釈放されるかもしれないっていうんで、歓迎したわけですね、拍手、喜んだんですね。」

浴田氏「あっこれでこの人たちは出ていけるんだなと思いました。」

### 【シーン2】

浴田氏「最初にあのダッカ事件のニュースが拘置所のラジオで流れたんですね」

金平「ラジオで流れたんですか？」

浴田氏「はい。あっそういうのがあるんだっていうのは分かってました。」

ナレ「その日のうちに自分が釈放リストに入っていることが分かった浴田氏だが、東アジア反日武装戦線は日本赤軍とは別の路線を取っていたことから、心境は複雑だった。」

金平「日本赤軍ですよ。海外に拠点があった。その人たちに対してのなんか感情っていうかね、それはどうだったんですか？」

浴田氏「えっとあんまり、いわゆる革命を目指しているという点においては一定の評価はしてたと思うんですけど、なんで彼らが外国にいるのか私は理解できなかったです。日本の革命運動、日本の国を変えるための闘争をするんじゃ、なんで外国でそれをやっているのか、パレスチナとかでやって、なんで日本の革命のために彼らはその力を使わないだろうというのが非常に疑問でした。」

ナレ「浴田氏は担当検事から釈放に応じないよう説得されたという。」

浴田氏「行きますというふうに答えたときにあそこは戦場だ。と流れ弾にもあたるだろうし、戦闘員にされて、そのすぐに死ぬ役をやらされるかもしれない、そういう意味で命の保証はないよというようなこととか、二度と日本に帰ってこれないよとかいうようなことをみんなこもごも言われましたね。だからやめたほうがいいと。というようなそういう説得だったというように受け止めてます。」

ナレ「それでも結局釈放に応じる考えを伝えた。その理由は」

浴田氏「これだけの人間を釈放したならば、人質を返すみたいなことを言ってたわけだから、私たちは行かないって言ったら、人質はかえってこないとか、そういう事態にはさせたくないというのが一番強い思いましたね。」

### 【シーン3】

ナレ「18年後の1995年、浴田氏は偽造パスポートでルーマニアに入国したとして、身柄を拘束され、国外退去処分になり、日本に向かう機内で逮捕された。その後懲役20年の判決が確定し、服役、去年3月に刑期を終えた。」

ナレ「浴田氏はかつての連続企業爆破事件などの武装闘争について、こう振り返っている。」

浴田氏「自分のやったことによって直接的に何人かの方に非常に大けがを負わせるとか、それからその人たちだけじゃ無く、その周りにいる人。その彼らがけがをしたりしたために人生を変えてしまわせた人が何人、その大勢、周りの人たちもいるし、それから私たちのやり方っていうのが、非常にあの間違っていたなど。私たちは武装闘争という手段を選んだんですね、社会を変えていくために今、何が必要かって考えたときに、武装闘争によってみんなに気づいてもらおうと。それから何が間違っているのかを明確にしようと。というようなことで武装闘争という手段を選んだんですけど、あの一武装闘争っていうのはやっぱり否定と破壊でしかないんですね。そっ



からは何も作れない。」

ナレ「浴田氏は今も自問自答を続けているという。」

浴田氏「ずっとこの 40 年間、どういふうにそれを償うっていうか、なんか克服できるだろうかっていうことを問われ続けて生きてきたんですが、少なくとも、同じ誤りは繰り返さない、それから、だれにも同じ過ちを繰り返させないために、自分がした間違いを教訓にしてもらえるような、そういうことをしないといけないだろうと思って生きてきたし、そのごめんなさい、ごめんなさいじゃなくって、あのこういう風に生きていくってことが、新しい社会を作っていく、何かを造る変革の仕方なんだという生き方をしないといけないという思いで、いるんですね。」

アメリカ国務省の公開された公文書については、アメリカ政府、日本政府、バングラデシュ政府、そして日本赤軍のハイジャッカーたちとの生々しいやり取りがその報告書に記されていること、ダッカ事件についてアメリカ国務省が公開した当時の公電は併せて百数十ページに及びその冒頭には、“機密”の文字があることなどが伝えられた。また、「午前 11 時 40 分、タバラク・フセイン外務大臣が電話で大使に次のように連絡してきた。”日本の航空機から無線連絡あり””当該機はハイジャックされ、ダッカへの着陸許可を要請する。”とのこと。ハイジャック犯は日本政府に対し、政治犯の釈放と現金 600 万ドルを要求。乗客は 141 人。」や「バングラデシュ政府は乗客の中にアメリカ国民がいることから、解決のため、より積極的になるよう要請。これに対し、アメリカ大使は脅しに応じず、時間稼ぎをすべきと回答。」「アメリカ政府にこの問題を解決してほしい。まず日本政府と議論することから始めてほしい。そして FBI は日本の警察と連絡を取ってほしい。」という公電の内容も取り上げられていた。

クルーガー氏へのインタビューについては以下に朱記したシーンが取り上げられていた。

金平「えー当時人質になったアメリカ人乗客が、男性が住んでいるというので訪ねていきます。」

ナレ「この時、機内にはアメリカ人の乗客が 12 人いた。公電には名前が記されている。そのうちの一人がカート・クルーガー氏だ。」

ナレ「機内はどんな状況だったのか、ロサンゼルスに住む、クルーガー氏を訪ねた。インドで一年間、ヨガや瞑想を学んでいたというクルーガー氏。インドのムンバイ空港で飛行機に搭乗する前、手荷物検査の時から違和感があったと証言する。」

クルーガー氏（翻訳・吹替）「後でわかったのですが、ハイジャック犯たちは私の前にいたんです。細い縦じまのスーツを着て、取り澄ましたビジネスマンらしい 5 人がいました。5 人のうち一番若い男が私の荷物をチェックしてくれれば、同僚の荷物は私がチェックするので、そのまま通してもらえないかと言ったんです。」

金平（翻訳・吹替）「それでハイジャック犯たちは簡単に爆弾や銃を持ち込めたのか？」

クルーガー氏「ええ、簡単に。彼らは何もチェックしなかったんです。」

ナレ「異変を感じつつも機内に乗り込んだクルーガー氏。事件が起きたのはムンバイを離陸して間もなくのことだった。」

クルーガー氏（翻訳・吹替）「何か叫びながら通路を走り、銃を持っているようでした。結局は手りゅう弾も持っていたんです。」

ナレ「思わぬ事態に騒然とする機内。日本赤軍のメンバー 5 人は前方と後方に別れ、乗客を監視したという。」

金平（字幕）「ハイジャック犯のリーダーはコックピットにいた？」

クルーガー氏（翻訳・吹替）「リーダーはだいたいそこにいました。他のハイジャック犯は中ほどの席にいました。」

常に1人か2人が監視していました。」

キャロル・ウェルズ氏へのインタビューでは以下に朱記した2つのシーンが取り上げられていた。

【シーン1】

金平「ネーロサンゼルスの高級住宅地、ビバリーヒルズのアパートメントにお住まいの方です。」

金平「HELLO!!NICE TO MEET TOO.VERY GOOD」

元ハリウッド女優 キャロル・ウェルズさん「I'M CHALLOL.CHALLOL WHEL.S」

ナレ「キャロル・ウェルズさん 75 歳。ウェルズさんは映画などで活躍した元ハリウッド女優だ。」

金平（字幕）「個人的なことだが、当時妊娠していた？」

ウェルズ氏（翻訳・吹替）「はい。妊娠初期でした。5月に結婚して、9月に新婚旅行に行きました。その時妊娠8週目から9週目でした。彼らが水も食べ物もくれなかったので、妊娠の辛さを感じました。」

ナレ「ウェルズさんは事件が起きた時の状況をこう振り返る。」

ウェルズ氏（翻訳・吹替）「後ろのほうから大きな音が聞こえて、何人か叫んだり、わめいたりしている人もいました。座れ、座れ、座れ、パスポート、パスポート。と叫んでいました。英語は2、3の単語しか話していませんでした。座るよう命令されたときに銃と手りゅう弾が見えました。すごく怖かったです。降りるまで水も食べ物も一切もらえませんでした。」

ナレ「ウェルズさんは近くにいた高齢の男性が病気で苦しむ様子を見るに見かね、トイレに行って水を持ち帰り、男性に差し出した。すると犯行グループは激怒したという。」

ウェルズ氏（翻訳・吹替）「激高したリーダーがやってきてにらみつけ、私の髪を後ろから引っ張って口の中に銃を突っ込みました。歯にグイッと押し当てたのです。頭を打ちぬかれると思いました。」

ナレ「ウェルズさんは病人の人質らとともに翌日には解放された事件後、流産していたことが分かった。」

【シーン2】

金平（翻訳・字幕）「日本政府は全ての要求を受け入れたが、そのことをどう評価する？」

ウェルズ氏（翻訳・吹替）「私は機内にいたので、とても感謝しています。そうでなければ違った考えをしていたかもしれませんが、人の命は何よりも大切です。日本政府とその行動にはとても感謝しています。」

カレイビアン氏へのインタビューでは以下に朱記した2つのシーンが取り上げられていた。

金平「アメリカ人乗客の中で非常に重要な動きをした人物にこれから会いに行きます。ご高齢の方でおそらく病床でのインタビューになると思われます。」

ナレ「ウェルズさんの当時の夫でカリフォルニアの州議会議員だったウォルター・カレイビアン氏だ。」

金平「あれから41年の歳月が経過していますが、あなたはあの事件に遭遇した経験を今でも覚えていらっしゃいますか？」

カレイビアン氏（翻訳・吹替）「とても鮮明に覚えています。昨日のことのよう。」

金平「あなたはアメリカ人の人質の代表者として、カーター大統領と直接話がしたいと申し出ましたですね。その経緯をお話ください。」

カレイビアン氏（翻訳・吹替）「この事件はアメリカ政府のトップの人たちとやり会わなければ、解決しないと分かっていました。アメリカ政府は長い間テロリストとは交渉しないという政策を取っていました。それは結局、交渉しなければ、我々は皆殺しになるということでした。」

ナレ「危機感を抱いてアメリカ政府とコンタクトを取ったカレイビアン氏。」

金平「FBIが日本の警察とコンタクトをして影響力を行使するよという風に要請していましたよね？」

カレイビアン氏「日本の警察がFBIのことを聞くだろうと思ったからです。アメリカ政府の一部の官僚がテロリストとは交渉しないといたらどうなるかと懸念していましたが、けっしてそんなことはありませんでした。」

金平「最終的にアメリカ政府はどういう役割を果たしたと思われませんか？」

カレイビアン氏（翻訳・吹替）「日本政府にストップをかけなかったことです。私は何よりも望んだのは日本政府が交渉すること。アメリカのようにテロリストとは交渉しないなんて馬鹿なことにならないのは、わかっていました。」

## 【シーン2】

ナレ「ハイジャックされた機内のカレイビアン氏には犯行グループを通じて、アメリカ政府からのメッセージが届いていた。」

公電（翻訳・吹替）「日本政府が可能な限りハイジャック犯の要望に応える決断を下したこと、そして10月1日正午ごろ東京発の航空機がダッカにつく予定であることを私たちは知らされています。」

ナレ「日本からの飛行機が来ると聞いたカレイビアン氏は」

カレイビアン氏（翻訳・吹替）「いいニュースだと思いました。私は立ち上がってにっこりしました。なぜならお金の問題さえ解決すれば、ハイジャック犯たちは他に何もしないだろう。そう予測していたからです。」

ナレ「身代金は釈放された6人によって、機内に運びこまれたという。」

カレイビアン氏（翻訳・吹替）「お金は黒いビニールのごみ袋に入っていました。ニューヨークのチェース銀行から日航機に運び込まれたものでした。持ち上げられなかったので、地面を引きずっていました。はい、重かったんです。」

ナレ「人質の安全を最優先した当時の日本政府の対応を事件に巻き込まれた当事者たちはどう受け止めているのか。」

金平「あの事件の後に世界のハイジャック事件への対応というのは、より強硬に、乗客の犠牲者が出ても仕方がないというような方向に変化したというふうにいわれていますけども、そのことについてカレイビアンさんはどういうふうに思われますか？」

カレイビアン氏（翻訳・吹替）「それは愚かなことです。ほとんどばかげているといってもいいくらいです。イスラエルがそうであるようにハイジャック犯と交渉するときには、どんな手でも使うものなのです。可能性が多ければ多いほど、交渉の立場は優位になるのですから。」

スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り返された。

膳場「凶悪事件を起こしたかつてのテロリストが今こういう言葉で語るのかーと聞き入ってしまいましたけれども、あのダッカ事件で釈放された人でインタビューに応じたのは浴田氏が初めてなんですよ？あの金平さん実際に会ってみてどんな印象でしたか？」

金平「そうですね、あの超法規的措置でね釈放された当時とはもちろん年齢も重ねて、容貌も姿もずっと変わってましたけれども、ある意味では考え方の根底にあるもの一貫して自分が犯した過ちっていうのを償い続けたいという気持ちをこちらはひしひしと伝わってきましたですね。当たり前のことですけども長時間あつてずっと話をしていると、相手が喜怒哀楽をもった人間であるっていうことで、テロリストという言葉では一区切りにはできないようなそういう単純なものではないなーと思いましたですね。」

日下部「当時高校生だったんですけども、すぐ後にですね、ルフトハンザ機がハイジャックされてその時の当時

の西ドイツで政府の対応が正反対に思えて、突入したわけですよ。私はいったいどっちが正しいんだろうと非常に戸惑った記憶があります。

金平「超法規的措置の評価って歴史的評価ってまだ定まってないんですね。そのテロ事件の実行犯とは一切交渉しないんだって一見勇ましい今現在の日本政府の姿勢っていうのは、正しいようにも見えますけれども、ダッカ事件では少なくとも一人の犠牲者も出してないんですね。で人の命は地球よりも重いつて言った福田元首相の言葉っていうのは当時は実は国民は支持してたってこともあってですね、さらにこの事件で人質になった生存者たちが今ね、当時の日本政府の姿勢に感謝しているっていうことの実事の重みっていうのをどう考えるべきかって、あのイスラム国の時の後藤健二さんの時の日本政府の対応なんかを考えるとですね、議論すべき点は多いなって思いますけど、ちょっと補っておきますと、女優のキャロル・ウェルズさんがですね、ハイジャック犯及びその関係者を憎んでたと。かつてはね。だけでも、去年イギリスで行われた国際映画祭で日本赤軍のリーダーだった重信房子氏の重信明さんの人生を描いたドキュメンタリー映画を見て、和解したいなということ語っていたことがとても印象に残ってますけどね。」

この特集において特に放送法上の問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

・【特集】 沖縄県知事選挙：結論→問題あり

玉城陣営の呉屋守政氏が語る「総決起大会でも政治家の先生方、国会議員の先生方は名前だけ紹介しましたがけれども、スピーチはご辛抱いただいたというところで政党色はあまり出ずに、ウイングの広いオール沖縄という風に言えたと思います。」と語るように、政党色を出さず国会議員を前面に出さないというのは「ウイングの広いオール沖縄」を演出するための戦略であり、それはまさしく選挙のプロである各政党の間での調整や協調の産物である。仮に、アマチュア選挙であれば、応援に入る国会議員に対して「政党色を出さないために自制を求める」ということができたのかは甚だ疑問である。また、琉球料理研究家の渡口初美候補と元社員の兼島俊候補は全くと言っていいほど取り上げられなかった一方で、佐喜眞候補と玉城候補ばかりがメディアに取り上げられるのは、やはり一定の組織による支持があり基礎票を固めているからこそ、メディアが主要候補として取り上げるのではないだろうか。

このように、実際には玉城陣営も基礎票を固め組織的かつ戦略的に選挙戦を展開していて、メディアからも渡口候補や兼島候補のように泡沫扱いされるのではなく、佐喜眞候補と並ぶあるいはそれ以上にメディアからも有力候補としてしっかりと取り上げられるにもかかわらず、この金平キャスターの「先ほど、佐喜眞陣営というのはご覧のようにこう組織力、宣伝力、物量で玉城陣営を圧倒していたというのが正直なところですね、それに加えて小泉進次郎議員のような、まあ彼は3度応援に入ってますね、その人気を最大限に活用するみたいなね、そういう意味ではこうプロの選挙戦を見せつけられたというような気がしますが、一方の玉城陣営はあくまでも、草の根の力に頼るといえるのか、まあゾウとアリというような言い方もしてましたけども、その両陣営の戦い方の違いを見ていると、まるで、本土政府と沖縄県の現在の関係の相似形といえるのか、似姿っていうのかな、取材を通じての率直な印象」などという総括的なコメントは玉城候補がいかにアマチュアの草の根選挙であり圧倒的な物量を誇る佐喜眞候補に対する弱きチャレンジャーという、誤った印象を視聴者に対して与えるおそれのあるものであろう。

検証者所感

特になし